

# ぼくのノオト

## ⑳ 走れ、おらが島のバス

初夏の風が波と遊ぶ、南の小さな島に着いた。バス停の横でストレッチをする若い運転手さんに、発車時刻と行き先を聞いた。「みんな乗ったら出ますよ、病院までなら百六十円ですね。」

バスに乗り、両替機に千円札を入れようとする、「ああ、それ壊れているから、はい、おつりね。」カリユシを着たお兄さんは、小銭が入ったザルからジャラジャラと八百四十円をくれた。

細い交差点でバスが停まると、昼間から泡盛で酔っ払っているおじさんが近寄ってきた。サングラスのバスドライバーは何やら言葉を交わし、バス停でもないのにドアを開け、日焼けした酔っ払いのおじさんをバスに乗せた。

乗るときに聞いた所でバスは停まり、島人を降ろし、用のないバス停は素通りしていく。車内アナウンスも、きっと壊れているのに違いない。

実はとても便利で、それでいて人に優しい。そんな自然で気取らない、小さな島のアナログバスが、心地いい。



認定NPO法人 いわき放射能市民測定室

たらちねクリニック

院長 藤田 操